# ミャンマーの子救うメス

## クーデター 病院は機能不全

## 福岡の田口、熊本の猪股両医師 現地で人材育成も

【バンコク稲田二郎】内戦状態のミャンマーで医療支援を続ける国際医療NPO法人「ジャパンハート」（東京）の要請を受け、福岡医療短期大（福岡市）学長の田口智章医師（68）と熊本労災病院（熊本県八代市）院長の猪股裕紀洋（ゆきひろ）医師（70）が6、7日、最大都市ヤンゴンで小児外科手術を執刀した。ほとんどの医療機関が機能不全に陥る中、難しい乳児の開腹手術などを無事に終えた2人。オンライン取材に「患者はあふれ、医師は足りない」と述べ、早急な医療体制の再整備を唱えた。

ジャパンハートは2004年の設立後、ミャンマーではヤンゴンやザガイン地域などで医療活動をしてきた。16年からは田口医師が教授を務めていた九州大の小児外科チームも協力。田口医師はこれまでに計10回現地に赴いて肝移植などを行ってきたが、新型コロナウイルスや軍事クーデターの影響で、20年2月を最後に入れなくなっていた。

関係者によると、現地では軍事クーデターに反発する医療関係者の「不服従運動」でほとんどの医療機関が休診。ジャパンハートが支援するヤンゴンの小児専門病院は診療を続ける数少ない医療機関で、午前8時半の開始を待つ人が病院の外まであふれかえる状況になっている。

小児外科のスペシャリストの2人は、現地スタッフでは対応が難しい手術を実施。難病の胆道閉鎖症で緊急性が高い乳児2人（生後4カ月と生後6カ月）の開腹手術など4件を担当した。資器材が不足しているため、猪股医師は器具を持参。3～4時間の手術を1日に2件ずつ行う厳しい状況だったが、技術力と集中力で乗り切った。

現地の状況について、猪股医師は「詳しく話は聞けていないが、貧血がひどい子や痩せた子がおり、生活が大変なんだろうなと想像した」。田口医師は「日本の専門的な小児科医に比べれば、ミャンマーの手術のクオリティーはまだまだ」と話し、現地の研修医を診察や手術に立ち会わせて人材育成も図ったという。

この病院では年間6千件の手術を行っていたが、医療従事者の減少で今は年1500件まで減少。複数の病棟も閉鎖された状態という。2人は「自分たちの技術で助かる命があるなら活動の場はどこでもいい。来て良かった」と語りつつ、「たくさんの患者がいて、厳しい状況で入院している方もいる」（猪股医師）と述べ、医療状況の改善に期待を寄せた。

ジャパンハートは1990年代に小児外科医の吉岡秀人代表がミャンマーで始めた医療活動が源流。吉岡代表も新型コロナなどで一時期は入国できなかったが、昨夏以降は毎月1、2回現地で手術などを行っている。ミャンマーではこれまでに約4万4400件の手術をしたという。

㊤手術を行う猪股医師（左）と田口医師＝ジャパンハート提供㊦リモートで取材に応じる田口医師（右）と猪股医師＝7日

(C)西日本新聞社　無断転載、複製及び頒布を禁止します。